

二〇〇X年、初冬。

クライアントのオフィスを出た途端、セールスプロモーション会社の横沢が、目の前でいきなり腰を曲げて深々と頭を下げた。

「お世話になりました。今回の話をうちがやらせてもらえたのは、ホントに三杉さんのおかげですよ」

横分けにしたおかつば風の髪を揺らし、横沢はべつ甲縁メガネの顔に人好きのする笑みを浮かべる。彼とビル内の廊下を歩きながらおれは、いやいや、と首を振った。

「御社の実力はこれまで充分見せていただいてますから。先方のクライアントさんにも喜んでもらったし、こちらこそ組ませていただいて良かった」

「無事に成功のうちに終わって、ほっとしてます」

「AI企画さんの仕事にまずハズレはないですからね」

「いやー、三杉さんにそう言っていただけと」
うれしいなあ、と横沢は頭を掻いた。

セールスプロモーションを請け負う『オフィスAI企画』の横沢と仕事するのは二度目だ。最初に組んだのは半年前。簡単なサンプリングを彼の会社に依頼したのだが、担当になった横沢は人あし

らしいのうまい男で、いつしよにやってて仕事が楽しかった。今回はそれを見込んで仕事を回したわけで、結果、期待に違わぬ成果を出してくれたのだった。

「またいつか、ごいつしよしたいですね」

「機会がありましたら、よろしく」

ビルの外へ出ると、枯れた木立の間から暖かな陽が射していた。立冬も過ぎたというテレビのアナウンサーの言葉通り、短い陽はそろそろ傾き始めているようだ。

「会社へ戻られるなら、送りましょうか」

駐車場の方向へ足を向けながら横沢が訊いてくる。

「あ、いや、今日は直帰と言っているのです」

「かまいませんよ。会社でも自宅でも、車なら同じですし」

どうしようか、とちよつと迷った。バスを乗り継ぐつもりでいたのだが、送ってもらえば早いし、距離的には自宅へ行くのとそう変わらない。

「じつは知人を訪ねようと思っているんですけど……」

「はいはい、いいですよ」

「すみません。それじゃあお言葉に甘えて」

彼のあとをついて駐車場へと向かった。

風の穏やかな日だった。訪問先のビルを出た横沢のゴルフは、小春日和の街並みを爽快に走った。早くも暖房器具を取り揃えた電気店の店頭。ウォームビズを謳うアパレルショップのウィンドウ。そしてまだまだ冬支度には早いと言わんばかりの元気な小学生たちが、

薄着の格好にランドセルを揺らして歩道を駆けていく。

緑葉と黄葉の入り混じる街路樹を助手席の窓から眺めているうちに、車は商店街を抜けて、落ち着いた霧囲気の住宅街へと入っていった。そろそろ丘陵地が見えてくる頃だ。

「あそこです」

丘の上には白いアパートメントが建っている。黄色く色づいた銀杏がそのまわりを縁取るように囲っていた。

坂の下で降りてもらってそこから歩こうと思っていたのだが、横沢はついだからと坂を登り、アパートの駐車場まで車を乗り入れた。いつもは自分の車で来るところだ。車窓から駐車場の敷地を何げなく見回していると、いつもおれが車を停める区画に別の車が停車していた。

「あれ、車がある……」

四角いフォルムをした赤の軽自動車だ。こんな車、ここにあるのを見たことがない。

「彼女、いらつしやるみたいですね」

横沢は赤の軽ということで変な勘違いをしたのか、そう言った。

彼女、ではないが、友人と言うよりはやはりカノジョの方が語感に近いのだろうか。高畠のことをなんと説明できるだろうか、余計なことだが内心ちよつと悩んだ。

横沢とはここでお別れだ。またいつか一緒に仕事をする機会もあるだろう。ゴルフが坂を下っていつて見えなくなつたあと、駐車場に一人たたずんで建物を眺めた。

青空にすつと美しい縦のラインを描く坂の上の白いアパートメントは、横に三所帯が入った計六世帯の二階建てだ。名を『海風荘』といい、二階の真ん中の部屋が高畠の住居だった。ほんの何歩かで到達できそうなその部屋のドアを下から見上げた。

先客があるというのは珍しい。たまにそういうことがあつても、たいていの場合客は彼の妹の裕未だったので、一考する必要もなかったのだ。横沢が考えたように、おれも赤の軽というところからこの車が裕未のものなのではないかとも思ったが、彼女が車を買うという話は聞かされていない。やはり来客か。

しばらくの間、外階段にまで吹き込んでいる銀杏の落ち葉を靴先で払ったり、坂の向こうの屋根を眺めたり、またドアを見上げたりというのを繰り返した挙げ句、おれは携帯を取り出した。名前を読み出してコールする。

「はい。高畠です」

久しぶりに聞く声だ。

「ああ、おれ。いまお客？」

「え……そうだけど……なに」

「いや、それならいいんだ。邪魔したな。もう切るよ」

「なんだよ、なにか用か」

「うん、ちよつと顔見たかったんだけど、客ならいいや。声聞けたし」

「……三杉。ひよつとしてお前、近くに來てる？」